

東京 異聞

とうけいぶん

小野不由美

新潮社



東京異聞

とうけいいぶん

小野不由美

新潮社



とうけい いぶん
東京異聞

著者 おのふゆみ
小野不由美

発行 一九九四年 四月二〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 営業〇三(3266)五一一 編集〇三(3266)五四一一

振替 東京四一八〇八

印刷所 株式会社光邦 製本所 大口製本印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えます。

価格はカバーに表示してあります。

© Fuyumi Ono 1994, Printed in Japan

ISBN4-10-397001-4 C0093

東京異聞 目次

序幕	ちかごろ、帝都に跋扈するものども	5
第一幕	さて、闇の筆とは	39
第二幕	一方、夜の筆とは	65
第三幕	夜の底、魚の回遊	124
第四幕	夜の者、満願成就の場	207
大詰	時代転変	294

装画／藤田新策
装帧／新潮社装帧室

東京異聞

序幕 ちかごろ、帝都に跋扈するものども

その街は海底の泥の中から浮上した。

都から遙かに離れた辺境、東国の地に栄えた港町は、浸食するものと堆積するもののせめぎあいの中でゆるやかに成長を続けてきた。その水際、入り江の最奥にひとつの城が建設され、そこに国政の中樞が置かれるやいなや、町は自然の摂理を裏切つて爆発的な増殖を始めたのだつた。

入り江が埋めたてられ、河口が埋めたてられた。すべての窪みが埋められ、均されてしまうと、陸地は海に向かって突出を始めた。汀は水が岸辺を切り崩すよりも早く、海に向かって前進していった。陸地が肥大していく以上の速度で、町もまた肥大していった。浅瀬が干され、湿地が埋められ、やがて泥の上には巨大な都市が出現した。国政の中心ではあつたが、都ではない都市が。それはちやうど泥の干潟が、はたして陸であるのか、それとも海であるのか、判然としない様に似ていた。

その都市の上に「都」の称号が置かれて、力の趨勢は確定した。この街を再び泥の中に引きこむことは許されない。そこには国体の威信が乗せられている。

帝都、東京。

江戸湊から始まって、時代の力を糧に肥大しつづけたこの地が、従来の呼称「江戸」から「東京」へと名を変えたのは、明治元年七月のことである。

この年の東京行幸を先触れに、翌年の再行幸でなしくずし的にそのまま「帝都・東京」は誕生した。

浸食するものと、堆積するものとの、嘗々と続いたせめぎあいの帰着した姿がそれだった。

もしも首都のありようがその国のありようを象徴するものならば、浸食するものを駆逐して軟泥の上に忽然と現れた都市は、必ず何かを象徴しているはずである。東京に住む者が、すでにそこが海であつたことを忘れ去っているように、忘却の中に葬り去られてしまったものがありはしないか。

帝都・東京、その誕生から二十九年。

十一ばかりの子供がとぼとぼと夜道を歩いてた。

場所は靈岸嶋銀町、石河岸を新川沿いに、向かうのは八丁堀、子供の名前を長松という。

一

長松は使いの帰りだった。

お母に頼まれて、お父に弁当を持っていったのだ。長松のお父は船人足をしている。銀町の酒問屋に詰めて、荷の揚げ降ろしを監督するのが今夜の仕事なのだった。

本当ならばもつと早くに行つて帰るはずだったのに、末の妹のツエが癪を起こして、お母は弁当を作るのが遅れた。

夜道をひとり心配だからと、ツエを背負つたまま家を出ようとするとお母の手から、弁当包みと提灯をひったくするようにして、長松は家を飛び出してきた。暗い夜道だからなおいつそう、朝から晩まで手内職で忙しいお母に行かせたくはなかったのだ。

そういうわけで長松は、こんな夜道を自分の足音に怯えながら歩くはめになったのだった。

土手蔵の続く道には灯火がない。長松の持った提灯の明かりばかりが、酒蔵の白壁にゆらゆらと揺れている。

人通りもなかった。

寂しいかというところでもなくて、新川をはさんだ四日市町のほうから、川面づたいに賑やかな音が細く響いてきている。

大勢の人間が鉦や太鼓を叩く音、それだけならば季節はずれの祭りだろうかと思うところだが、鉦太鼓の音に混じって「かやせやい、かやせよお」と叫ぶ大勢の音が聞こえる。

長松はなにやら背筋の寒いのを、足を速めてやりすごした。

夕暮れどきに隠れんぼうをしたばかな子供がいたのだ。隠し婆にさらわれて、それでああして探している。

長松の家の近所でも、つい半月前に子供が消えたばかりだ。近所中の大人たちが、自分たちまでもが隠されぬよう、互いに縄につかまって、鉦や太鼓を叩きながら姿を消した子供を探した。子供の行方は知れなかつた。川に落ちたか井戸に落ちたか、それとも。

隠れんぼうの鬼が隠れ家の前を通り過ぎるのを、息を詰めてやりすごす子供の肩を、叩いた誰かの手があつたのだろうか。

長松の目に見えるのは黒々と並んだ蔵の屋根ばかり、子供を探す人々の姿も見えず、明かりも見えない。

夜の向こう側から微かに聞こえる音はまるで狸囃子たぬきばやしのようだった。その調子が陽気なだけに、風にとぎれてぼつぼつ届けば、かえつてなにやら嘘寒い。

長松はひたすらに足を進めている。

前の方にぼつりと薄暗い明かりが見えたのは、二之橋を過ぎて一之橋のたもとにさしかかつたときだった。

なにしろ暗い中をひとり歩いてきたものだから、長松はにわかになんか安堵した。息をついて提灯の柄

を握りなおし、無意識のうちにそれでなくても急いだ足がさらに急いで、ゆらゆらと小さな影も駆け足になる。

しかしながら、明かりの正体が分かる程度に近づいて、長松はぴたりと足をとめた。

法被はつびを着た男の後ろ姿だった。酔ったようにふうらりと歩く背に、明かりの入った袋が背負われていた。

まさかいまじぶん、蛍売りだろうか。

長松は首をかしげた。どうあつても蛍の季節にはまだまだ早い。とはいえ、背に黒紹くろしょうの袋を背負つて中に明かりが見えるのであれば、蛍売りだと思えない。

子供らしい好奇心で、いつたいてどこで獲つてきたのだと、心細さも半分には、声をかけようかと思つたのだが。

少し待つたほうがよくないか。蛍売りにしか見えないものの、はて、あの蛍、なにやら大きすぎはしないだろうか。

暗く冷たい光の色は蛍のようだが、それは大人の拳ほどもあるように見える。それが三つ四つほど袋の中を漂っている。

蛍にしてはどうにもおかしい。そもそも、こんな蔵ばかりの通りを流して商いになるのか。蛍売りなら夏の宵、涼を求めて辻の縁台に出る人々を狙つて来ると決まつている。

狸囃子は途切れ途切れに続いている。

声をかけようか、それともこのまま見送ろうか。

長松の決心がつかないうちに、男の姿は富嶋町とみしまちょうの角を曲がつていった。長松は釈然しゃくぜんとしないまま、揺れて遠ざかる明かりを見ていた。

『ありやあ、人魂売りですわいなア』

急に若い女の声がして、長松はひよんと心臓が飛び跳ねた心持ちがした。

『獲った人魂を、見世物にするばかり』

かつん、と乾いた堅い音がして、つられたように長松は振り返ってしまった。

蔵と蔵の間の小路、角から半身をのぞかせるようにして長松を見ている顔を見つけた。思わず一步退つたのは、その顔が人形の首だったからだ。

人形は娘、髪に挿した簪が提灯の明かりにきらきら揺れた。鹿子の半襟、黒襟をかけた黄八丈、町娘のこしらえだが、なにしろ見事な人形だった。

人形だけが宙に浮いているかのようなだった。よくよく見れば背後に黒衣の姿が見える。人形遣いか、と思うものの、これほど立派な人形を遣う見世物など、これまでに見たことがない。長松が見た人形遣いといえば、一尺ほどのお粗末な人形を、黒布を顔にかけた遣い手が口ずさむ浄瑠璃に合わせて踊らせるだけ、その踊りも両手が袂をひらひらさせるていど、いま目の前にある人形とは比べるべくもない。

『さて、坊やはどちらへお行きかえ』

人形は首を傾げる。つられて長松も首を傾げた。

『この子はね』

言ったのは驚いたことに、男の声だった。かつん、と人形が背後の黒衣を見上げる。

「銀町の父親に弁当を届けてきたところだ。感心なことじゃないか。この夜道、神隠しやら怪しげな見世物やら盛んに世間を騒がせているのに、提灯ひとつを頼みにねえ」

『ほんに、それは孝行な』

黒衣は蔵の角に雨ざらしになった、古い酒樽に腰を下ろしていた。子供を膝の上に抱きかかえるよ

うにして人形を抱いているが、その両腕が抱いた形にはつきり見えるのはどういふわけか。あれが黒衣の腕ならば、人形を遣う手は誰のものか。これでは人形が生きているようではないか。

「孝行者には良い報いがある。人魂売りもさすがにこの子は見逃した。これが遊び浮かれて家を忘れた子供なら、くるりと握ねて袋の中に放りこんだだろうよ。黒糸の中には人魂がひとつ増えて、子供の姿がひとつ消えるという按配」

あんぐり口をあけてたたずんだ長松の前で、黒衣は低く含み笑う。

「なあに、袋は袈裟をほどいたものだ。抹香臭いが、経文の音も染みこんでいる。ああして揺すられている間に、手向けの回向も済む寸法」

くすくすと、娘もまた笑った。

『良うできた趣向じゃわいなア』

「だろう」

黒衣は言つてから、唐突に樽を降りて蔵の陰に身を隠した。人形だけが蔵の陰から顔をのぞかせていたが、それもするりと消えうせる。男の声だけが小路の方から響いてきた。

「気をつけてお帰り。早く早く、一心にねえ」

ほかんとそれを見送った長松は、幾度か瞬きをして我に返った。あわてて人形を追い、小路の口に向けて提灯を掲げてみたが、長い小路のどこにも何の姿も見えなかつた。

かやせやい、と狸囃子の音が聞こえる。

長松はひとつ息を呑んで踵を返した。

逃げるのじゃない。家ではお母が心配している。

小さな影が、まろぶようにして去っていく。

それを見送るようになっていた娘は、こつんと背後を振り返った。

『あれ。あのようには怯えて』娘島田の頭を黒衣の腕にもたせかける。

『お前さまも、人の悪い』

抱えた腕の中から見上げてくる娘の顔をのぞきこんで、黒衣は含み笑った。

「すこうしね、知ったほうがいいんだよ。近頃、夜道は油断がならないとね」

娘は黙って小首をかしげた。ことり、と乾いた音がまた小さく夜に響いた。

「電灯だとか瓦斯灯だとか。夜の端々に灯火を点して闇を追い払った気であるようだが、灯火は畢竟、紛いものでしかない。夜はただ暗いだけじゃないのだからね」そう言つて、黒手甲の手が娘の顎を軽く撫でる。「川面に板を浮かべて蓋するようなものだ。板の上に土を盛って石を敷いて、それで川を無くしたことになるだろうか」

黒衣の指がくすぐるようにして娘の頬を辿ると、娘はこつんと首をかしげてその手に頬擦りするふうを見せた。それをのぞきこむ黒衣が、黒頭巾の下でふと笑つた気配がする。

「ましてや、魚は水底に住むものだから。川底の魚は死骸でこそつつくが、人を襲つたりはしないけどね。だけど、夜の底に住む魚はねえ」

くすくすと娘は笑つたが、果たして黒衣の言葉に笑つたのか、それとも黒衣の指に笑つたのか。

「不幸な男の話を聞きたいかい」

『封印切やら籠釣瓶やら、耳に砥もできようわいなア』

「そんな昔の話じゃない。昨今のこの東京の話だ」

娘は首をかしげた。

「いいからお聞き。亥蔵という男がいる」

黒衣はいとおしげな手つきで白い首を撫でている。

「亥蔵は信州松本の生まれだ。家はお定まりの農家で亥蔵はその三男。丁稚働きに売られて、この東京にやってきた」

二

勤め先は深川にある醬油屋で、その間に女房も持ったし、子供も三人持っている。蕎麦の屋台を引くようになったのは五年前、屋台の上がり是一家五人の生活に足りない。女房が針仕事で、一番上のみつが日銭仕事で家計を助けてかつかつのありさま。

さて、その亥蔵が店の仕舞いを段取りしていると、西の方角から一人の老人が歩いてくるのが目に入った。

爺は風変わりな唐人姿。一見して唐辛子売りかとも思えたが、先の垂れた唐人帽をちよんと被って、袴も丈も余った広袖といい、お父の唐人衣装を借り着した子供という按配。背丈も低くて子供のようだが、子供でない証拠に深い皺と雪のような顎鬚がある。この顎鬚も鳩尾に届こうかという長さ、真っ白になった眉も目許を覆うばかり、なにやら胡乱なことこのうえもない。

これがふらりと暖簾を分け、蕎麦を、と言う。

「仕舞いのところを済まんかの」

いえ、と亥蔵は笑って蕎麦を手筈に入れて湯の中に落とした。

「火を落とす前でようござんした。辛子の商いですかい」
商いにしては荷が見えない。それは承知のうえだった。

「辛子売りに見えようか」

爺は飄々とした口調をしていた。

「珍しい扮装じゃござんすね」

「儂^わや、易者^じじゃよ」

へえ、と亥蔵は呟く。

「そりやあ、珍しい。爺さんのような易者は初めて見た」

爺は鞆^{たもと}のような音で笑う。

「そうかね。仕舞いの邪魔をした詫びに、ひとつあんたも占ってしんぜようか」

「そりやあ、どうも」

亥蔵は軽く愛想笑いを浮かべた。共に酔客めあての蕎麦屋と易者は河岸^{かし}が重なることが多い。易者、人相見^{にんそうみ}なら幾人も知っているが、初めて見る趣向なので興味が湧いた。蕎麦の茹で具合を見ながら、爺が天眼鏡^{てんがんきやう}なり筮竹^{しちちく}なりを出すのを待ったのだが。

易者は丸い石製の皿をひとつ懐から取り出した。何やら細かな細工をした皿の表面を撫でながら、亥蔵の顔を見る。

「して、あんた生まれはいつだね」

「八月ですが。八月の八日」

「旧かい、新かい」

「旧でさ」

「生まれの時刻は分かるうかの」

「宿曜^{すくよう}ですかい。明け方と聞いておりやすが」

いやいや、と老爺は呟く。亥蔵はその手元をのぞきこんだ。

「なんです、そりやあ」

老爺は、ふむ、と言っただけで亥蔵の問いには答えなかった。亥蔵が茹でた蕎麦を笊^{しゆ}に上げて水で洗う間にも、枯れた指で石皿をなでている。怪訝^{けつげん}に思いながら蕎麦と猪口^{ちよく}とを出す亥蔵に、爺は意味

ありげな目つきをした。

「爺さん、それで」

老爺は答えなかつた。石皿を懐に戻して、黙々と蕎麦を食う。なんだ、からかわれたのか、と亥蔵も黙って片づけにかかつた。道に屈みこみ、七輪の火を落として炭の始末をしていたときだ。

「観ると言つた以上は、言わずばなるまいて」

老爺の声がして、亥蔵は顔を上げた。屋台ごし、屈んだ亥蔵から爺の姿は見えなかつた。

「もしも五つの生まれなら、あんた、死ぬよ」

亥蔵は手を止めた。屋台の縁に挟まれた暖簾が捲れて戻るのだけが見えた。

「家には帰りつけまいて。こんなことなら観るのじゃなかつた」

「爺さん」

亥蔵は立ちあがる。すでに爺の姿はなく、屋台の縁に一錢硬貨が置いてあつた。

「まったく、げんの悪い」

悪態をつきながら、亥蔵は屋台を曳く。淡路坂、太田稻荷の前までたどり着いていた。社に向かつて滅多になく頭を下げたのは、悪い辻占を落としたからだ。

足を止めたせいで少し重くなった屋台を改めて曳きなおいし、亥蔵はさらに足を進める。社を右手に通り過ぎ、曲がり角まで来たところで足を止めた。その角の宙をふらふらと飛ぶ白いものを見たせいだつた。

ちやうどあたりは神田川の土手、それでなくとも寂しいところで、しかも通りに面した家も店もすでに戸締まりしたあと、近辺には閑散と人氣がない。

「なんだ、ありやあ」